半田更生保護サポートセンターだより
情報発信を通じて更生保護の諸活動に対して地域の理解や協力が十分に得られるように努めます。

vol.06 2022.01

地域の安全・安心の要 ～保護司の適任者確保～

名古屋保護観察所長
弥永 理絵

コロナ禍により、私たちのかけがえのない日常は大きく変わり、更生保護活動も、従来と同様の形では実施が難しい場面が増えております。このような状況にあっても、保護司の皆様におかれましては、様々な感染防止対策に御配慮されつつ、保護観察処遇や犯罪予防活動に多大な御尽力をいただき、厚く御礼申し上げます。コロナとの戦いは、言わば持久戦の様相を呈していますが、引き続き、感染防止対策を徹底しながらの更生保護活動に御理解、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、保護司の適任者確保が、更生保護の喫緊の最重要課題の一つとなっています。全国の保護司の数は、近年減少の一途をたどり、将来にわたって保護司制度を維持・発展させる上で、大変憂慮すべき状況が続いています。保護司は「地域の安全・安心の要」であり、県内でも今後多くの保護司の方々が定年での退任時期を迎えることを考えますと、保護司の適任者を計画的に確保していくことが極めて重要です。愛知県保護司会連合会と当庁が共同で、保護司適任者確保愛知県推進本部を設置し、方針に基づいて保護司適任者確保に向けた取組を進めていますが、全ての保護司の皆様と当庁職員が、改めて保護司制度の意義や皆様が積み重ねてこられた実績を再確認し、危機感を共有して、一体となって取り組んでいくことが肝要と考えております。当庁といたしましては、一人でも多くの方に保護司になっていただくとともに、やりがいを感じながら長く活動を継続していただけるよう、事件担当の保護司複数指名等、具体的な取組を進めてまいりますので、御理解、御協力をよろしくお願い申し上げます。

また、保護司専用ホームページ「H@（はあと）」の運用が本年8月から開始され、一部分ではありますが、保護司活動をウェブ上で行うことができるようになりました。各種の処遇参考資料や動画も閲覧できますので、御活用いただければ幸いです。

“社会を明るくする運動”作文コンテスト表彰式（10月15日半田市役所）

“社会を明るくする運動”標語表彰式（8月19日半田市福祉文化会館）

誰もが安心して暮らせるまちを目指して

半田市長
久世 孝宏

半田保護区保護司会を始めとする更生保護を支える皆さまにおかれましては、日々「地域の犯罪・非行の防止」などの更生保護活動にご尽力いただき、心より深く感謝申し上げます。

半田市を明るくするためには、犯罪や非行から立ち直ろうとする人たちを、社会が迎え入れ・支えることが必要であると考えております。

そのためには、誰もが再チャレンジして活躍できる社会を構築することが重要であり、本市においても、皆さまのご協力をいただき、市民の皆さまへ更生保護への理解を深めていただく活動などに取り組んでいるところであります。

私も、今年から〝社会を明るくする運動〟半田市推進委員会の委員長となり、様々な活動に参加させていただいております。その中でも、市内の小中学校の児童・生徒を対象とした標語募集、作文コンクールでは、「犯罪や非行のない明るい社会づくり」、「犯罪・非行をした人たちの立ち直り」という普段なじみのないテーマに対して、作品を作り上げていく中で家族と話し合うなど、子どもたちが「更生保護」について考える良いきっかけとなり、「自分たちも社会や地域の一員である」という自覚が芽生えたのではと感じております。

また、市内鴉根町には、明治の中期から約30年間にわたり数多くの社会的弱者を保護、救済してきた「榊原弱者救済所」がありました。これは、更生保護精神の原点であり、市民の「人」に対する優しさを大切にしてきた証でもあります。この「思い」を後世につなげていくためにも、多くの方にこの施設を知っていただき、更生保護への理解が深まることを願っています。

平成28年12月に国は「再犯防止推進法」を施行し、愛知県においても本年「再犯防止推進計画」が策定されました。再犯防止は「誰一人取り残さない社会」の実現に向けた必要な取り組みであり、犯罪のない安全で安心なまちづくりを推進する上での新たな課題として捉えております。

本市としましても、罪を犯した人も孤立しないよう、また社会の一員として社会復帰できるよう、皆さまとともに、支援する環境をつくってまいりますので、引き続きのご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

やさしく強く、1万5千人もの弱者を保護・救済した

榊原亀三郎と弱者救済所

半田地方の旦那衆が救済事業をどう支援したのか
地道な援助もあれば、あっと驚く企画もあった
豪商だけでなく多くの商工業者に支えられた救済所

ヤクザから一転、社会事業家に

榊原亀三郎は28歳頃まで、「べっ甲亀」と呼ばれ、成岩町を地盤とする侠客。子分は70人を超えている一家の親分だった。

ある日、亀三郎は子分たち全員を集めた。

四つの部屋の襖（ふすま）を取りはらった広い座敷に、若い衆がひしめくように坐っている。一人一人の顔をじっと見回した亀三郎は、おもむろにこう宣言した。

「今日限り、この組は解散する」。

どぉ～っという、地鳴りのような驚きの声が座敷に響いた。

榊原亀三郎　（1867～1925）

「俺は正業につく。正業といっても他でもない、今後は世間から見捨てられた人や帰る家がない人たちの助けになろうと思っている」

ここまで言うと亀三郎は、若い衆の顔をもう一度、一人、一人、見回した。

「何をばかな、と思うだろうが、人間の一生は一度だけだ。極道（ごくどう）をして人さまに嫌われながら生きるのも一生。辛くとも、人さまのために働き、人さまに感謝されるのも一生だ。人さまに感謝される道を歩いてみることにした」。

部屋の中はまだ、ざわざわとしていた。

丁寧に丁寧に亀三郎は話し続けた。

「誰もが好きで悪（わる）になったわけじゃないが、そうでもしなければ俺たちは食ってはいけなかったよな。そんな世間さまから厄介者（やっかいもの）扱いされる連中が、一緒に力を合わせて安心して暮らや旦那衆も救済所を支援するようにもなったのです。

まさにこれこそ今日の〝社会を明るくする運動〟の魁（さきがけ）といえる動きでした。結果、30年にわたり、1万5千人もの人が救済されたのです。

その後、大戦もあり救済所の存在は忘れられていました。

しかし80数年後の平成22年。この亀三郎の偉業を称え、後世に伝えようとする動きが起き、半田市、半田保護区保護司会、鴉根区、はんだ郷土史研究会が四位一体となり『榊原弱者救済所跡保存会』が立ち上がったのです。

榊原弱者救済所とは

明治32年（1899）のこと、今の半田市成岩の人、榊原亀三郎は、社会から棄てられた孤児・捨て子、不幸な女性、極貧家庭の老人、身体障がい者、出所者・刑余者らを保護・救済する施設を個人で造りました。彼が目指したのは社会的に虐げられ、家族からさえも見捨てられた弱い人が、差別されず、蔑視されずに幸せに暮らせる「新しい村」でした。

新しい村は半田の丘陵部、鴉根に造られました。当初、地元の理解もなかなか得られませんでしたが、やがて亀三郎たちが私欲なく、懸命に弱者を救う姿に地元民の心も動き、好意的になりました。そして地元の豪商

せる家があればいいと思わないか」

亀三郎は淡々と今後のプランを語った。

「鴉根の丘にそんな家を造る。新しい村を造る。ここでは前科者も不良も差別したりしない。みんなで更生の道を探し、手に職をつけ、堂々と社会に戻れるようにする」

「身体が悪くて働けない者は、ずっとその家にいればいい」

「捨て子や浮浪児も引き取り、大事に育てる。そうすれば極道の道には入らず、堅気の大人になれる」、そして、「この救済事業はやがて社会に認められるだろう」。

こう宣言した亀三郎は鴉根の丘に〝新しい村〟を造る準備に取りかかったのである。

半田市鴉根は今でこそ立派な住宅地だが、明治の初期はまったくの原野。今の名鉄線より山側は人家など殆ど無く一面の雑木林だった。

その山の一帯に成岩町の名刹、常楽寺が広大な寺領を持っていた。亀三郎は弱者救済の必要性を訴え、寺領の一部を無償で借りることができた。それを聞いた成岩町の大地主、榊原市兵衛や後に成岩町長になる森竹四郎が、「慈善事業に使うのなら」と鴉根山に所有する山林を寄付してくれた。

そして嬉しいことに、慈善活動をしようとする亀三郎に何と30人の若い衆がついて来たのだ。つまりこの瞬間、30人ものヤクザが更生の道を歩みはじめたのである。

老病者宿舎　明治中期、富国強兵政策は格差を広げ社会的弱者を多く生んだ。孤児・捨て子、極貧の家は身障者や老人を捨てることもあった。帰る家のない不幸な女性や出所者も路頭に迷っていた時代だ。

鴉根の丘に槌音高く

明治31年（1898）春。鴉根の丘に開墾の槌音が響いていた。

亀三郎と30名の若い衆は成岩町極楽寺に借りた仮の家から毎日、毎朝、鴉根の丘に通っていた。

「おい、おい、べっ甲亀の一統だよ。鴉根の山で慈善事業をするらしいが、どうせヤクザのすることだ、新手の資金集めだろうよ」

町の衆の目は冷たかった。

そんな冷たい目にさらされながらも亀三郎たち30人は鴉根に通い続け、開墾を続けた。

明治32年正月、鴉根の丘の雑木林の中にぽっかりと6百坪の更地が誕生した。その6ケ月後に藁屋根造りの粗末なものだが2棟の宿舎も出来上がった。

最終的には総面積22町歩（6万6千坪）、そのうち4千坪を整地して宿舎や武道場、宗教施設など11棟を建設。総建坪は7百坪を超える大きなものとなっていくのだが、その第1期工事といえるものが完成したのである。

早速、救済事業がスタートした。

道端に捨てられていた赤ん坊を連れてきた。橋の下で泣いていた捨て子も連れて来た。手足に障害がある老人は極貧家庭ゆえに〝口べらし〟で家を追われていたが、その老人も鴉根に連れてきて保護した。あっという間に救済した人は10人を超え、宿舎は一杯になった。

救済してきた人は働けない人ばかり。それに30人の若い衆。食費だけでも大変な額になる。宿舎の玄関に墨痕鮮やかに「榊原救済所」と記した看板は出したが、亀三郎の財布はからっぽだった。

ニコニコと笑う亀三郎だが、着る物がだんだん粗末になっていた。寒の季節なのに綿のドテラも着ていない。自慢の懐中時計はいつの間にかない。それどころか着物の帯が藁縄（わらなわ）に変わっていた。そんな物まで金に換えていたのだ。

それは30人の若い衆も同様。食いたい盛り着たい盛りの若者が、粗末な食事に文句も言わず、ボロな衣服もいとわず、もくもくと新しい宿舎の建設や畑作業に従事していた。

若い衆は一人も減っていない。この事業に対する情熱も失われていない。それは不遇な境遇に生まれ育ち、世間から差別され、苛（さいな）まれて生きてきた彼らが、生まれて初めて「世の為、人の為」に働ける喜び。同時に、今まで自分たちを差別してきた世間に対する逆バネが働いていたのだろう。救済所の雰囲気は良好だった。

しかし、亀三郎と救済所は資金的な面では大ピンチだった。

半田地方の豪商たちの援助

困窮の亀三郎。そこに願ってもない助っ人が来てくれた。知多郡亀崎町の酒造家で資産家で衆議院議員の天埜伊左衛門である。

「地元で、こんな救済事業が始まっていることを知らぬとは迂闊だった。本来、官が行うべきことを一人の民間人がされている。頭の下る思いだ」。

天埜は鴉根の丘に駆けつけた。人力車から飛び降りた天埜は一瞬、たじろいだ。彼の目に映ったのは、三棟の宿舎、鶏や豚の牧場、馬小屋、そして畑。粗末だがしっかりと整備された施設の在り様だ。かつて一面の荒れ野だった鴉根の地を知る天埜にとって、衝撃が走る思いだった。

元々篤志の思いが強い天埜は全力での応援を亀三郎に約束した。

数日後、天埜から荷が届いた。大八車で二台の大きな荷であった。

布団が三流れ、木綿の半纏十八枚、股引二十五足、木綿綿入の着物三枚、袷の着物三枚、紺足袋十足、手拭四十五枚、それに玄米一俵。

救済所に歓声があがった。

当時の衣類など布物は現在と違い格段に高価だった。食費に手一杯の亀三郎のやりくりでは、とても衣類にまで手が届かないことを天埜は救済所の人たちを見てわかっていた。

天埜は資産家仲間に「着る物や建築材料を援助してやってくれ」と頼んでくれた。

そんな天埜の声を受けて、半田の豪商・小栗三郎より篤志の品物が届いた。

小栗三郎商店は「萬三」の屋号で知られる知多半島屈指の大店。萬三からの品は次。

木綿綿入の着物三枚、木綿の半纏二枚、子どもの半纏六枚、子どもの綿入の着物二枚、子どもの襦袢七枚、紺足袋十六足、白足袋五足、子どもの紺足袋四足、踏下一足、子どもの股引一足、前掛一筋、それに赤味噌一樽。

子どもの物が多いのは、捨て子たちを救済所で保護していることを聞いていたからだろう。「子どもたちには、せめて世間並みの服装を」、そんな気持ちが伝わってくる品々だ。

品物もありがたかったが、知多郡を代表する名家、天埜家や萬三家より篤志品が届いたという事実が大きかった。知多郡地方は武家社会ではない。商人社会である。その支配者ともいえる豪商が応援する施設、榊原弱者救済所は一気に認知されたのであった。

明治35年を迎えるころ、救済所への理解はさらに深まっていった。

2月1日付の知多新聞に、「さる一月十八日以来、成岩町貧民救済、榊原亀三郎氏へ金品を恵与せられたる篤志家左の如し」の記事。

十八日　半田町小栗銀作氏より蒸米粒1斗五升

十九日　杉本半田警察署長は織田巡査部長を随えて貧民救助の状態及び牧場の設備等を巡視せられたる後、同所念仏堂に不具者の読経に参し、灯明料として金若干を寄付せられたり

二十四日　亀崎町伊東信蔵氏より紺足袋二足、シャツ十二枚、白足袋十三足、股引二足、木綿縞子ども袷一枚、チョッキ一枚

二十九日　半田町字岩滑新田榊原兵四郎氏より金二円

これは十日間ほどの記載だから、通算すればかなりの寄付が寄せられるようになっていたはずだ。また、見逃してはいけないのは、記載の四件が地元の成岩町ではなく、半田町、亀崎町、岩滑村と町をまたがっていることだ。

この時代、この地方は近隣町村の仲は特に悪かった。半田町と成岩町は境界線を争って愛知県を巻き込むほどの大紛争になったあげく、互いを罵りあう「成岩ガンチ（他所を蔑視する造語）」の思想が定着するなど、その対抗意識

児童宿舎の前　7人の子どもたちと5人の女性。この宿舎で一緒に暮らしていた。後に「笛を吹く少年」の石像。「寄贈　花井芳二郎」の札が。この日は大正9年10月。「紀念碑の除幕日」で、よそ行きの服装。少年の運動靴には時代的に驚きもある

は異常に強かった。隣の町に行くときは身の危険すら感じる、というのが一般の感覚だった。

だから町境を越えて篤志が寄せられている事実は些細なことのようだが、この地方の郷土文化史的にみると瞠目すべき出来事なのである。

亀三郎の弱者救済事業は少なくとも「ガンチの壁」は破っていたのだ。

救済所を支えた地元の名士たち

左の「紀念碑」に刻まれた半田地方の企業で、現在もご盛業な方をみてみる。

伊東合資、金沢歯科、ミツカン、萬三商店、新美眼科、中野整形外科、小出医院、尾張製粉、丸初製菓、天埜酒造等々。この他、調査不足で漏れも多くあると思うがお許し願いたい。

榊原弱者救済所跡・史跡公園　移築された「紀念碑」には救済所を支援してくれた91名の名が刻まれている。大臣、知事、高僧、高官。さらに金原明善、留岡幸助ら全国的著名人。ほか、地元の商人も多い。板山の晒し業者は亀三郎亡き後も救済所を支えた。

救済所は開所から数年は極貧そのものだったが、亀三郎たちの身を粉にして弱い人たちのために働く姿に打たれた地元の人たちが支援するようになり、日本初、日本最大の民営の弱者救済施設が続けられたのである。

こんな史実も書いておく。

「亀三郎の心意気に感動した。救済事業への寄付を集めてやろう」という人が現れたのだ。

乙川村の平野萬太郎、杉浦勝次郎、半田町の榊原畔蔵である。平野は乙川村の料理旅館「大島屋」の若旦那。杉浦は大農家の主人。榊原は半田町の商店主。地元のいわゆる旦那衆だ。

彼らは豪商ではないが町の中心にいる人で住民との距離も近い。そんな旦那衆の応援は地域住民に安心感を与え、亀三郎の救済所の距離を縮めることができた。この三人の登場は派手ではないが極めて貴重だった。

平野の「大島屋」は、昔から面倒見のいいのが評判の店である。乙川村の生んだ「悲しき横綱」大碇紋太郎を長く居候させていたのもこの店。また、後に画家名鑑に載るほどになった荒川公圭も世話になっている。日本画壇の重鎮で文展（今の日展）の審査員にもなる山本梅荘もこの店の居候だった。その逸話である。

「山本梅荘がまだ三河に住んでいて半邨と号していた頃、知多郡に来ると大島屋に逗留していた。飲食代や宿賃の代わりだったのだろう、彼の画が大島屋にたくさん残っていた」。

「その後も梅荘の弟子たちが多く来ていた。代金代わりに置いていった彼らの画や短冊が、小折に二、三杯もあった」。

このように不遇の文化人には同情的で数多くの文人、画家などを「ただ同然で泊めたり遊ばせたり」していた店であった。

ちょっと脱線。

この「大島屋」の子孫筋に近年、半田保護区保護司会の会長を務めた蟹江正行がいる。蟹江は、埋もれていた亀三郎の救済所の発掘と一般公開に尽力し、榊原弱者救済所跡保存会を起ち上げた中心人物だ。「大島屋」の平野から現代の蟹江。亀三郎を繋ぐ善い流れが見えて嬉しい。

さて明治の当時に戻る。

大島屋の平野が一肌脱いだ。かつて面倒をみた山本梅荘に救済所の支援を頼んだのである。

梅荘は快諾。それを実子であり弟子でもある石叟と香雲に話す。すると彼らは、驚くような方法で榊原救済事業の応援をしたのである。

慈善音楽会と千枚画会

石叟の趣味は音楽、トランペット奏者だ。弟の香雲もアコーディオン奏者。二人は「半田楽友会」というアマチュアグループを組織していた。ここを中心に音楽会は準備されていった。

この音楽会はアマチュアの洋楽だけではもたない。琴、琵琶、三味線。それに謡曲。さらに当時流行の義太夫、これはプロを呼んだ。

会場は半田町北条の光照院。広い本堂を持つ名刹である。日時は明治41年10月24日午後1時開演と決まりポスターも作成。こちらは

絵画のプロ。梅荘の門人たちが技を競って描くのだから文句なし。芸術的にも立派なポスターが街角のあちこちに貼られた。あっという間に半田地方の各町村に慈善音楽会の開催が知れ渡った。

いよいよ当日。音楽会が開演された。

今はよくあるチャリティーコンサートだが、当時は稀なこと。まして一般の人たちには珍しい音楽会。広い光照院に人垣が出来たのである。

「子どもは無料だよ。けど座布団や椅子に坐っちゃいけないよ。お席は年長の人に譲るんだ」

「大人の人は篤志を願います。いくらでも構いません。出せる人はお札を、そうじゃない人は小銭で結構。このお金は恵まれない人を救済している榊原救済所に全額、寄付されます」。

会場の入口と舞台の横に空の酒樽が置かれ、そこに次々と金が投げ込まれていった。おそらく半田地方初であろうチャリティーコンサートは大成功を収めた。

さらに石叟は妙手を打った。

石叟は十数人の弟子たちの技量を練磨するため二年間の合宿をし、それぞれに一千枚の画を描かせることにした。この合宿を「千枚画会」と名づけた。そして千枚の画が完成すると即売、それを寄付金に充てる。こんな企画だ。

この千枚画会の合宿は慈善音楽会の翌年5月に光照院で始まった。

千枚画会の進め方は、まず石叟が、尺五絹本に密画の山水を描く。それを弟子たちが見て臨写する。石叟の筆使いを側で見て、弟子たちもそれに習う。だから石叟も一千枚の画を描くわけだ。合宿する弟子同様、彼は早朝から深夜まで画筆を握り続けていた。

合宿には香雲もよく顔を出して弟子を指導。梅荘も時々来て、弟子たちを励ましていた。

二年間の猛烈な合宿で弟子たちの技量はすこぶる上達をみた。そして一人が一千枚ずつ描いた画が、光照院に積み上げられていた。見事、技量練達の面では合宿は成功したのである。

そして販売である。買い手があるかどうかは心配だった。しかし、心配をよそに一万枚をゆうに超す画はほとんどが売れた。これは取りも直さず弟子たちの技量が上り、値段の付く画を描けるようになったからに他ならない。

弟子もめでたしだが、石叟もしてやったりだ。彼の手許に7千円ほどの金が出来ていた。

絹本代、絵具代など約4千円が経費。残りの約3千円は、新築中の半田小学校へ2千5百円を寄付、榊原救済所に5百円を寄付。地元の町内会、子ども会にも合わせて百円を寄付した。

救済所に来た5百円の寄付は、みすぼらしかった建物の改修にあてられ、少しは見られるものになった。

千人に近い音楽会の入場者、千枚画会の画を買ってくれた数千人の人。そんな多くの人に弱者救済事業を知らしめてくれた梅荘一門の功績は金額をはるかに上回るものであった。

金原明善と収容者の社会復帰

亀三郎がヤクザの足を洗い、慈善事業に人生をかける決意をさせたのは金原明善（きんばらめいぜん）である。

静岡の大資産家の金原。巨額の私財を投げ出して成し遂げた天竜川治水事業や北海道開拓、木曽川上流の植林事業などで知られる偉大な社会事業家である。また、更生保護事業の産みの親でもある。

金原に心酔した亀三郎は彼の許に通い、社会事業を学んだ。金原は亀三郎に多くの人を紹介した。例えば山岡鉄舟の一刀正伝無刀流の道場。ここで亀三郎は武士の哲学と剣術を会得した。後に愛知県警剣術師範となる源がここである。

安城農林学校長の山崎延吉もそう。山崎は鴉根の救済所に何度も通い、耕作物や土壌、肥料の指導にあたった。桑やブドウを植えさせて安定した収益をあげさせた。さらに大根の栽培法を教えて大豊作に。それを知った成岩の農家が救済所に教えを乞いに来たほどだ。結果、成岩、武豊は大根の名産地となる。有名な「武豊たくわん」の発祥は鴉根救済所だったわけだ。

社会復帰の後押し、支援

社会から弾き出された弱者を保護救済するのが事業の終わりでない。保護した人をもう一度、社会に送り出すことが重要だ。亀三郎はそのために様々な努力をした。ひとつだけ紹介する。

社会復帰していく男に、「がんばって百円貯めろ。貯まれば俺が百円足してやる。二百円あれば借家が借りられて家財道具が揃う。そうなれば嫁を世話してやる。いい家庭を作るんだ」。

恵まれない家に生まれ、虐げられてきた男には「いい家庭が持てる」は何よりの励みになった。懸命に働いたのである。

この結果、榊原救済所からの社会復帰の成功率（自活率）は80％を超えた。これは金原の創った静岡県出獄人保護会社の自活率が45％だったことを思えば驚異的な数字である。

プロのスタッフがいる静岡保護会社を超えた要因は、「各々の不幸な身の上を理解して、お前は一人じゃない、俺たちがいる」の姿勢で接することができたからだろう。

○

亀三郎は大正14年7月に事故死したのだが、その数日前に新聞記者にこう語っていた。

「お上がしっかりと貧困対策や福祉対策をしてくれなければ、孤児も生まれる。行き場のない出獄者も、路頭に迷う老人もでるだろう。そんな人たちを私は黙って受け入れていく」

「一人の孤児もいなくなる世など私の生きているうちには来そうもないから、鴉根の丘に理想的な長屋を百軒建てて、多くの孤児や家のない人たちを引き取るつもりだ」。

30年に亘り1万5千人もの弱者を救済した榊原救済所の偉業も、地元の人々、地元の旦那衆の支援がなければ成すことができなかったのだ。本稿ではそれらの史実を率直に紹介し、現代の皆さまの共感とご理解を求めるものである。

【西まさる】

鴉根史跡公園　皆さまのご支援で救済所跡は公園化。一般公開されている

＊西まさる『幸せの風を求めて』（新葉館出版）が底本。
＊敬称はすべて略した。ご寛容を

更生保護の始まり。吾助の話

明治初期静岡刑務所に前科を重ねた吾助という男が収監されていた。吾助はどうしようもないワルで看守も手を焼いていた。当時の副典獄（刑務所長）は川村矯一郎。監獄の改善に熱心な人だった。

川村が吾助に会ってみると、根っからの悪人には思えない。それから度々会話を交わし、心が打ち解けるようになった。

やがて吾助は完全に改悛（かいしゅん）、『今までずいぶん悪いことをして来ましたが、今後は道に外れたことは誓ってしません。あなたのお言葉は、きっと骨に刻みます』と言うようになった。

そして満期になり放免（ほうめん）。出所の折も、何度も何度も川村に更生を誓っていた。

吾助は十年ぶりに自分の家に帰ってみると、すでに父母はなく、女房は別の男と再婚していた。おまけに三人の子どももいる。ここには帰れないと思い、親戚に行き、庭の隅でいいから一晩泊めてくれと頼むが、お前のような前科者は親戚ではない、と強く断わられた。

どこに行くにも一銭の金もなく、やむなく警察に行き一晩の保護を頼んだが、放免した者に手を貸すわけにはいかぬ、と、ここも断わられた。

食うものもない、寝るところもない。昔なら迷わず窃盗、強盗に走ったのだろうが、川村の言葉が脳裏（のうり）に浮かぶ。行き場を失った吾助は、村の池に身を投げて死んでしまった。そこには川村に宛てた長い遺書が残っていた。

動揺した川村は金原明善に相談。金原は『川村さん、あなたの名訓戒（めいくんかい）も、人を殺すに至っては功徳（くどく）とは言えぬ。改心して監獄を出た者を社会がしっかり受けとめる方法を考えなくてはいかん』。そして金原明善が主導して、出所者が社会復帰できるよう保護する静岡県出獄人保護会社というものができた。現在の更生保護制度の嚆矢（こうし）といえるものだ。

この話を亀三郎は自分の身に引き寄せた。鴉根の救済所もこの思想から出発している。

半田更生保護
サポートセンターだより
vol.06　2022.01

〈お問合せ先〉
半田更生保護サポートセンター
TEL 0569-84-0683
半田市東洋町二丁目1番地 半田市役所2階

発行：半田保護区保護司会　協力：半田商工会議所

半田更生保護サポートセンター
公式Facebook
いいね！お願いします

半田更生保護サポートセンター
公式Twitter
フォローお願いします